

るの は な

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2012

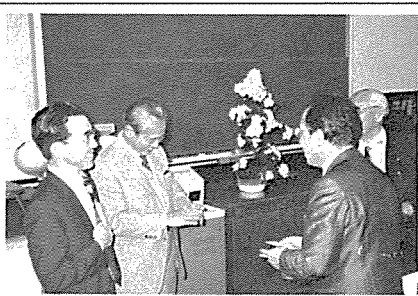
千葉大学医学部同窓会報 第77号 題字 鈴木 五郎

本年度るの は な 同窓会 総会開催さる

昭和五十六年度るの は な 同窓会総会は、去る六月二十日(土)午後三時三〇分より医学部本館大講義室で開催された。会場はもとこの病院屋階大講堂といわれたところで改修成って面目を一新したが、そこに昔の面影はあり会員諸氏それぞれに懐旧の情はあったと思われる。小林金市会長挨拶、井出医学部長の学内近況報告、萩原常任理事の会務報告、石川清文常任理事の五十五年度決算、五十六年度予算案の説明の後これを可決、今春定年退官の三浦義彰名誉教授を名誉会員に推せん、会則の一部改正が議せられて議事を終了した。ここ一年間に六十名程の物故会員があり一同心よりの黙祷を捧げた。

静かに国際情勢を語ってくれた。ロンドン特派員、ボン支局長、外信部長、政治部長と多彩な道を歩んだ氏がアジア総局長時代に「サイゴン陥落」に遭遇し、いayゆる内戦というものの悲惨をみて日本の立場をどう考え、個人の生き方をいかに省みたらが語られて意義

深くもがった。「ぎりぎりの線では年長者が責任をとるべきだ」「崩れない国際とり決めはなからう」「兵器が変わっても戦略的に主な点は変わらないであろう」こうした言葉を日常生活の問題や言葉に置きかえてみると少しくおそろしい気もした。地球上の各地の内戦を氏の言うように利権の交待としてみると国家間の紛争のあわれさも考えさせられた。



深いものがあつた。ぎりぎりの線では年長者が責任をとるべきだ」「崩れない国際とり決めはなからう」「兵器が変わっても戦略的に主な点は変わらないであろう」こうした言葉を日常生活の問題や言葉に置きかえてみると少しくおそろしい気もした。地球上の各地の内戦を氏の言うように利権の交待としてみると国家間の紛争のあわれさも考えさせられた。

懇親会は新しい学生食堂で行われたが、かつての第二外科臨床講堂ときいて驚いた方々が多かった。記念講演は「分子生物学から細胞生物学へ」という題であるが、すでにアブストラクトもあることであるし、難しい話は敬遠されそうだとこのことで、スライドを用いてご幼少時から、文学青年時代軍服時代、外国との交流、さらには研究内容と、年代を追っての先生の歩みを実に要領よく示され、最後に弟子達の中から一流の専門家が出るようになったことを喜び、自分自身は核酸の研究から分子生物学へと進み、これの臨床医学との結びつき、再生肝、がんの研究など今のレベルは細胞生物学のレベルであることと結ばれ、多大の感銘を与えた。

引き続いての祝宴では、米沢院長代理の挨拶、横川教授の発声による乾盃のあと、市川同門代表、新井正友人代表、島園先生、吉川春寿先生、相磯名誉教授の挨拶、懇談が続き、降矢教授の萬歳三唱で閉会になるまで、約二〇〇人の参加者を得て、和やかで充実した会であった。

急告

○生化学第一講座主任教授に藤村眞示氏決定。
去る6月22日の医学部教授会において生化学第一講座の主任教授に藤村眞示氏(昭和35年卒・千葉県がんセンター研究局生化学研究部長)を選出し、8月1日付で発令をみた。

○横浜市立医科大学病理教授に蟹沢成好氏決定。
蟹沢成好氏(昭和31年卒・東京都老人病研基礎病理部)には、横浜市立医科大学病理学教授に決定した。いづれも次号に抱負のほど掲載する予定である。

三浦教授退官記念式典

——なんとなくフリースタイル——

五月三十日、県文化会館小ホールで、三浦義彰前教授の退官記念会が行なわれた。桑田教授の司会ですま井出医学部長が挨拶、三浦先生の歩みを紹介、核酸に関する研究、遺伝子工学のさきがけとし

ての研究や業績などのほか、図書館長として、テニス部長として広い方面のご活躍にふれ、シュバリエ・ド・なんととかいう勲章をフランスから貰われたと述べた。ついで香月学長の祝辞(東大を足すと

三十六年余、教官として教育・研究に携われたこと、継続する自然の生命現象の追求が盛んになっている今、三浦教授の退官は惜しまれることである。同窓会長小林金市先生、京大早石修教授等からの祝電披露、同門代表市川豊一先生の祝辞(五十余名の門下生を育てられたこと等)のあと麻生助教授が教室を代表して謝辞を述べ、さらに記念品、花束の贈呈が行なわ

れた。とくに留學生代表カトリック・ブルランさん、ネバーのセレストア君の贈呈は、先生の国際性の一端を示すものとして注目された。主賓挨拶で先生は「現在の心境はいわく言い難しであるが、なんとなくフリースタイルではなくてなんとなくフリースタイルだと言った所」と冗談めかしながらも、少々淋しそうであった。

○相磯和嘉氏(昭和11年卒) 熱二等旭日重光章・元千葉大学長 ○今井丈二氏(大正14年卒) 熱五等瑞宝章・住所 千葉県山武郡大網白里町経田二八五
○お相磯和嘉元学長の叙勲祝賀会が去る7月2日・千葉駅ビルホールにて開催された。発起人は香月秀雄学長・井出源四郎医学部長・小林金市県医師会長・沼田武千葉県知事・松井旭千葉市長・緒方太郎千葉銀頭取・土屋秀雄千葉日報社長等(順不同)であり、これらの発起人の顔ぶれからもわかるように、各方面から三百余名の参加者があり、盛会を極めた。これも先生の千葉大学をはじめ、各方面において永年にわたるご努力の賜であることは申すまでもない。先生の今後のご活躍をなお期待する処である。

会 計 報 告

昭和55年度 決 算 報 告

A 収 入 の 部

科 目	予 算 額	年度末収入計	差引高(△減)
財 産 収 入	300,000円	278,920円	△21,080円
会 費 収 入	4,400,000	5,227,700	827,700
事 業 収 入	160,000	360,210	200,210
寄 附 金	100	288,260	288,160
繰 入 金	0	0	0
繰 越 金	4,412,894	4,412,894	0
収 入 計	9,272,994	10,567,984	1,294,990

B 支 出 の 部

科 目	予 算 額	年度末支出計	差引高(△減)
1. 事 業 費			
会 報 発 行 費	650,000	422,560	△227,440
名 簿 発 行 費	500,000	600,000	100,000
新 会 員 歓 迎 費	200,000	200,000	0
顕 彰 奨 学 費	200,000	0	200,000
慶 弔 費	50,000	86,210	36,210
支 部 連 絡 費	300,000	90,000	△210,000
小 計	1,900,000	1,398,770	△501,230

2. 事 務 費

備 品 費	50,000	83,150	33,150
消 耗 品 費	150,000	105,690	△44,310
通 信 印 刷 費	2,000,000	1,354,990	△645,010
振 替 手 数 料	150,000	86,040	△63,960
会 議 費	200,000	48,210	△151,790
諸 手 当 費	800,000	931,500	131,500
謝 金 費	80,000	58,100	△21,900
小 計	3,430,000	2,667,680	△762,320

3. 予 備 費

基 金 繰 入 額	3,000,000	3,000,000	0
予 備 費	942,994	25,900	△917,094
小 計	3,942,994	3,025,900	
支 出 計	9,272,994	7,092,350	
繰 越 額		3,475,634	

基 金 6,000,000+3,000,000=9,000,000

昭和56年度 予 算 案

A 収 入 の 部

科 目	予 算 額	前年度比(△減)
財 産 収 入	300,000円	0円
会 費 収 入	5,000,000	600,000
事 業 収 入	0	△160,000
寄 附 金	100	0
繰 入 金	0	0
繰 越 金	3,475,634	△937,260
収 入 計	8,775,734	△497,260

B 支 出 の 部

科 目	予 算 額	前年度比(△減)
1. 事 業 費		
会 報 発 行 費	650,000	0
名 簿 発 行 費	400,000	△100,000
新 会 員 歓 迎 費	300,000	100,000
顕 彰 奨 学 費	200,000	0
慶 弔 費	80,000	30,000
支 部 連 絡 費	300,000	0
小 計	1,930,000	30,000

2. 事 務 費

備 品 費	50,000	0
消 耗 品 費	150,000	0
通 信 印 刷 費	1,800,000	△200,000
振 替 手 数 料	100,000	△50,000
会 議 費	200,000	0
諸 手 当 費	950,000	150,000
謝 金 費	100,000	20,000
小 計	3,350,000	△80,000

3. 予 備 費

基 金 繰 入 額	3,000,000	0
予 備 費	495,734	△447,260
小 計	3,495,734	△447,260
支 出 計	8,775,734	△497,260

基 金 9,000,000円

会沢太冲先生 退官記念会

パーテイ開催

会沢太冲氏(昭和13年卒)には去る4月1日付で国立療養所千葉東病院院長を退官され、名誉院長に推挙された。これにともない去る4月25日千葉駅ビルホールで、先生とゆかりの深い方二百余名が集い、盛大な記念パーテイが開催された。先生は本学を昭和13年卒業、

市原

ゐのはな会便り

四月十五日、大学本部より萩原、奥井両教授、県医師会的小林会長、有益理事の御出席をいただき、第三回市原のゐのはな会を五井グランドホテルにおいて開催しました。参加者二十八名。

市原市医師会執行部の交替で新副会長二名がゐのはな会員であるので、その激励の意味と市原市は帝京大学医学部附属病院の市内姉崎地区への進出問題を抱えているので、天に二つの太陽は不要である如く、また人間の膂が二つあつては、おかしいごとく、市原市医療の根幹をなす大学は只々一つ千葉大学があればいいというのが、われらのいつわらざる本心であるので、これを大学本部および県医師会幹部に知っていただきたい故の開催でありました。

これに対し、萩原教授の大学の最近の動向、同教授の訪中談(最近北京へ行かれた由)等に耳を傾け、奥井教授より「市原は大きな

第一外科に入り、昭和18年軍事保健院医官として、傷痍軍人千葉療養所に勤務、当時困難を極めた肺結核の医療に挺身、故岡田藤助所長・故倉田庫治院長を補佐し、千葉療養所・千城園を統合し、国立療養所千葉東病院として再出発後副院長・院長に昇任、今日に至ったわけで、まさに四十年に及ぶ歩みは東病院の歴史そのものと誰しも認める処である。



問題をかかえている時で、悩む多大と存じます。皆様の合意を得てよい解決策を見出すようお願いいたします」という激励の言葉、さらに小林会長、有益理事よりは、地区代表の県理事や医師会会長会議等を通じてよく地区の状況を県医に伝えて欲しいという言葉があつて、春宵の一夜を有意義に過したことでした。

(幹事 斎藤記)

千葉大学医学部附属病院

救急部・医療情報部の紹介

救急部

庵原昭一（昭31卒）



連診療科と連絡をとるに受診し、入院を要しながら関連科が満床の場合、重症で集中治療を要する場合各科にまたがる症例の場合などに救急部病室に収容し、両者協力して診療の実をあげています。またこのルートをはずれた救急患者や、関連診療科との連絡に円滑を欠く緊急事態には救急部が窓口となり解決に努めます。

一方、本院内に発生した呼吸循環・代謝など集中治療を必要とする緊急重症患者は各科病室や手術場から緊急入室させ、各種モニターや新治療機器の恩恵と二十四時間の濃厚な看護、各科専門医や救急部医の共同治療をうけます。また手術後特に危険が予測される重症者はクリティカル状態を脱するまで本病室に入室し、麻酔科をはじめ当該科、放射線・検査技師の多大の協力を得ております。昨年六月に病室が開設され既に九一年、百八十五名が収容され、お蔭様で特別のトラブルもなく機能しました。他方、時間外・休日外来では一ヶ月患者数は二百十三百名、うち入院七十一・九十名、救急車四十・六十台で、関連科の当直医、救急当直医（救急部員と診療部長）科医の輪番制で一名、外来看護婦事務当直があたっています。

これらの診療内容は、私がお世話になってきた第一外科では経験しなかった様な多岐の病態や救急患者も多く、その診断と治療の進

医療情報部

里村洋一（昭41卒）



昭和四十一年十月に、外科畑を離れて、専任教官となつて以来、『イリ・ヨウ・ジ・ウ・ホ・フ』つて何をきかされて、その度に頭をひねりながら、長たらしい説明をしぼり出してきました。人々の認識は、

に外部の情報機関の利用までが含まれます。医療情報部は、これらの中で、病院もしくは医学部の範囲で、しかも全診療科に共通するような業務でのコンピュータ利用を担当してきております。医療情報部設立以前からの、医事会計システム、新病院移転以来の中央病歴室における、外来、入院病歴書及び退院サマリーのコンピュータ管理。そして、昨年から今年にかけて実現した、医療データベース（投薬、処置の内容や検査データのコンピュータ記録とその検索システム）の運営。中央検査部のコンピュータ化など、を実現してまいりました。特に、中央検査部と医療データベースを結合させて、全病棟に置かれたコンピュータ端末により、検査データ報告書、データ経過表やそのグラフ作成を医師が自分で行えるようにしたシステムは、内外を問わず、最も進んだ医療サポートの例であると自負しています。

なシステムを開発運営してゆくには、困難があります。今後は、病院各分野の人々が、自から自分達の業務のコンピュータ化に担わり医療情報部は、その手段と技術を提供し、総合的な調整や企画、中央の施設の管理に当るのが良からうかと考えています。そのために、は、取扱いのやさしいシステム開発の手段、その利用のための教育啓発が課題であります。

**実地医家のための
会について**

永井友二郎(昭16卒)



皆様がすでに御承知のように、医学と医療とはいま世界的規模で大きな曲角に当面しています。



永井友二郎（昭16卒）

実地医家のための
会について

学会が正面から取組んでいる課題最も重要な、本来の医療はどうあるべきか、即ちプライマリ・ケアという事柄そのものにほかなりません。

わが国で、この人間中心、病人中心の医療本来の在り方を求めてきた「実地医家のための会」は本年二月、第二〇〇回例会を迎えました。十八年の歴史をもっています。この会は、第一線の家庭医が、その持ち場の特有の諸問題を、相互に胸を貸しあい、討論し調査し、研鑽しあう目的でつくった会で、これまで第一線医療の実態を示す「心筋梗塞共同調査」「脳血管障害共同調査」「加齢と疾病」その他すぐれた調査を残しているほか、前記の日本プライマリ・ケア学会を発足させる母体として大きい役割りを果たしました。

この「実地医家のための会」には本学出身の浦田久、渡辺武、栗原伸夫、上野恭一らの諸兄が世話人として、また会員としては川島正夫、松下一人、越川英夫、内田成和、古川英政ほか多くの方々が熱心に会の活動を支えておられます。

私は実地医家のための会創立当時、故松村墓名誉教授からいただいた「この御企画を実現せられた仁兄の卓越せる御見識と御愛情に至高の敬意を表し、成田日赤當時の仁兄の真面目を心に画いております」のおことばに何とかこたえたいと自分をばげまして今日に至りました。

(第三回日本フライマリ・
ケア学会会頭
実地医家のための会世話人)

二七会 (昭和27年卒)

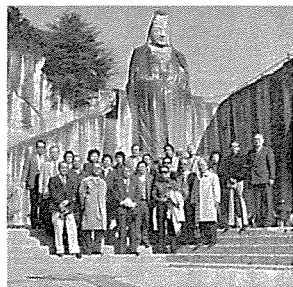
毎年集っている二七会であるが55年度は、11月8日、9日の両日村井幹事の設定で、栃木路に秋を探索し、明らかな風光と山の味覚を満喫し、旧交を温めた。

参加人員は、奥様方5人を含めて22名であったが、宇都宮駅からバスで鳥山のヤナに直行、鮎料理で腹ごしらえをし、小砂窯で、湯呑みに各自絵つけをし、陶器を、お土産に買いこみ、塩原温泉に一泊。近況報告やら、のど自慢等に楽しい一夜を過ごした。大浜博利君の歌は絶品で、しばし拍手がなり止まなかった。

翌日は、日塩道路を白滝経由、鬼怒川に廻り、竜王峡を尋ね、大谷観音を拝観、杏花楼の支那料理に舌づつみを打ち、宇都宮駅で解散したが、大変楽しい級会であった。ただ残念であったのは、大学・学会の動向、トビックス等を聞きたいと思っていた教授方が一人も参加されなかった事である。忙

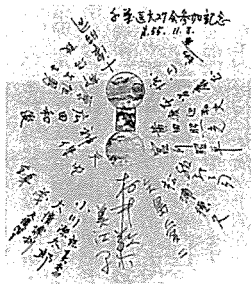
昭和33年卒クラス会

春とはいえ肌寒さの残る3月28日2年振りに33年卒のクラス会を新宿の「朋松」で開催いたしました。ちょうど年度末と学会シーズン入りの頃と重なったためか、前回よりやや集りが悪く、総勢23名の参加でした。東京、千葉以外の遠方からは、富士の宇野君が出席され御苦労様でした。



しい体である事はよく判るのだが何とか、万障繰合せて、次回からは是非共出席の上、同級生の為に何か話しても貰いたいものである。

尚、出席者名は、記念寄せ書きの通りである。(文責 村井)



先づ、昨年3月に急逝した田中汎実君の冥福を祈って、一同厳肅に黙祷を捧げました。

宴会に入り、千葉医師会の大立物松石君の音頭で、お互の健康を祝って乾杯の盃を挙げ、続いて記念撮影をすませ、賑やかに歓談に移りました。出席者が夫々の近況を語り合い、時間の経つのも忘れそる五十路に手の届く頃となり、世間的には定年間近からぬ熟年

昭和46年卒同窓会

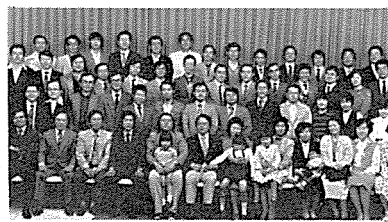
昭和56年4月18日、千葉のほてい家で、昭和46年度医学部卒業生の第1回同窓会を開催した。

卒業後10年の区切りとして始めて開いたクラス会であったが、予想をはるかに上回る55名の多くの仲間が集まった。10年ぶりに再会した人達もいたが、6年間一緒に学生生活を送った為か、全くブランクを感じることなく、2次会、3次会と土曜の夜を大勢で楽しく歓談した。

同窓生達は、千葉のみならず関東一円で活躍しており、開業した仲間も10名前後を数えた。今後更にお互いの交流を深める



など、おだてられて、学問に仕事に精を出し、働き中毒の昭和11年の特性を遺憾なく発揮してはおりますが、生理的の老化現象には抗すべくもなく、白髪または薄髪も目立ち、肉体的補修工事を余儀な

三六会卒業
二十周年記念会

昭和三十六年度医学部卒業の我々にとっては、今年がちょうど二十周年ということになる。最近ほとんど毎年同窓会を行なってきたので、特別の気持もなかったが一応の区切りで、常任幹事(青木諏訪部、谷口)らの発案により、今年は記念アルバムをつくることか母校に記念樹を植えようとか、いろいろとアイデアは出されていた。しかし、とりあえず昔の(ま



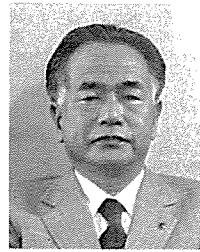
が、幹事にしても一同にとつても実にうれしい限りであった。それからが大変で、えらい先生ばかりであり、席次はどうするか、乾杯の音頭をどなたにお願いするかなどなど。

パーティーは三月七日、市内のほてい家で開かれた。一番御年長の三輪清三先生の御発声で開宴となった。その他の御出席の先生方は卒業年度順にあげると、小林龍男先生、竹内勝先生、柳沢利喜雄先生、中山恒明先生、相磯和嘉先生、百瀬剛一先生、北村武先生、横川宗雄先生が学生時代の教授の方々であり、当時から現在まで教授をお務めの方は横川先生だけであるその他の来賓として、特に我々のクラスともなじみが深い井出源四郎医学部長と、解剖の大谷克己教授にお越しいただいた。また、せっかく御出席の返事をいただいた

千葉県立

衛生短期大学の開設

学 長 井 和 行 (昭24卒)



(第一生化学)の四教授に就任して頂きました。また非常勤講師として医学部から八名、その他の学部から七名お願いしてあります。

更に看護科学生の実習病院として大学附属病院に多大のお世話をお願いすることになります。学期による設置目的には「一般教養を高め、保健医療に関する知識及び技術を教授研究し、社会の福祉と文化の進展に寄与する専門技術者を育成する」とあります。特に千葉県の医療技術者就中看護婦等は、依然として著しい不足状態であり、また、量的補充も勿論ですが、短大を創ることによって質的にもより優れた人材を一日も早く世に送り出したいと思うものであります。私は学生に厳しいカリキュラムに

本年四月県立として初めての短期大学が千葉市若葉二丁目に開学致しました。国電幕張駅から海の方に歩いて十二、三分のところ、埋立地で既に県立幕張三高校があり、近く放送大学が建つ予定の、いわゆる「学園の町」と称する場所です。敷地五万平方メートル、建物一万二千平方メートルで管理棟、教育棟A(歯科衛生学科、栄養学科)B(看護学科)講堂、図書館、学生ホールから成り、体育館、プール、テニスコート等は未完成です。白い四階建のなかなかスマートな校舎であります。一学年の定員は四学科二〇名即ち第一看護学科(高校普通科卒)八〇名、第二看護学科(高校看護科卒)四〇名、歯科衛生学科五〇名、栄養学科五〇名です。専任教員五〇名(教授十名、助教授十一名、講師九名、助手十六名、非常勤講師五十六名、事務職員十七名が学生の教育と学校の運営に当ります。本学からは小藤田和郎(一内)渡辺誠介(神経内科)加藤軍四郎(第三解剖)福井紀子



都立墨東病院

吉 松 彰 (昭33卒)

よる勉学の他に、生涯を通してロマンを追求める、豊かで心の広い人間になって貰うことを願って居ります。二年、三年の教育でそれはなかなかむづかしいことでしようが、学生に自然と人間を愛する心情を少しでも持つて貰うように努力して参ります。全国の公立短大の中では五十一番目の誕生ですが、私共にとっては全く初めて

の経験ですので、現在のところ可成りの試行錯誤を繰り返して居りますが、教職員一同一生懸命に努力して立派な校舎に恥じない内容を作ろうとして居りますので、同窓会諸兄におかれましては、何かと御援助御指導をお願い申し上げます。

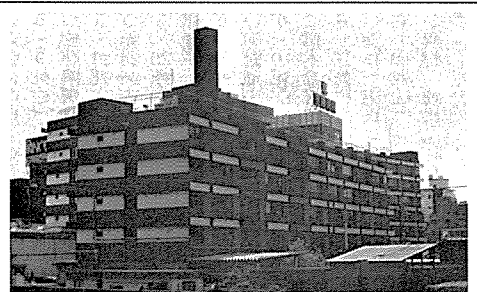
校庭の隅は度切鳴くところ

都立墨東病院は、総武線錦糸町駅より歩いて七分の所にあり、その歴史は、明治12年に、当時全国に大流行し暴威をふるっていたコレラに対処するために東京市深川区に設立された官立避難病院に始まる。その後、伝染病専門の本所病院となった。一方、関東大震災の罹災傷病者救護の目的で作られた簡易療養所が、一般病院として発展し、それが深川病院、墨田病院と名称が変わった。この本所・墨田の両病院が併合し、旧本所病院の敷地に総合病院として完成したのが現在の墨東病院である。36年4月にこの墨東病院が誕生して以来、拡大を続け、現在では、診療科は17科、医師数百名で、五百床のベッドと一日平均千人以上の外来患者の診療を行い、墨田・江東地区唯一の公立総合病院として、日夜活動している。

墨東病院の名前が有名である理由の一つは、年間二万人も来院する夜間の救急患者の数である。墨田・江東・葛飾・江戸川の各区はもとより、遠くは千葉市や柏市からも夜間に急患が来院し、当直医は入院患者の処置と急患の対応に追われ、横になるひまさえもない状態である。

千葉大と墨東病院の関連を語る時、忘れることのできないのは、亡くなられた丹治汪先生(昭15年卒)のことである。先生は大学卒業後直ちに東京都に就職され、その後伝染病の治療一筋に歩まれ、49年11月に墨東病院副院長を最後に停年退職されるまで、終始「わが母校千葉医大」を口ぐせに、医員として、またイン턴として勤務した後輩の面倒をみてこられた。

今回、本年四月より産婦人科の西堀乙彦先生(23年卒)が副院長に就任され、歴代院長・副院長のほとんどが東大出身者が占める中で、丹治先生に次いで二人目の千葉大出身の副院長が誕生した。先生が管理手腕をおおいに発揮されていることを、後輩一同が期待している。



その他、本学出身者は、耳鼻咽喉科山田文則部長(24年卒)、感染症科村田三紗子医長(37年卒)、産婦人科守矢和人医長(38年卒)、武永博(53年卒)、渡天順(病理学教室、内科磯田典之(46年卒)、佐野千寿子(50年卒)、小児科吉松彰(33年卒)、石田琢生(49年卒)、青嶺裕之(55年卒)が活躍している。特に、産婦人科と小児科には、千葉大の医局から毎年若い医局員がローテーションで勤務し、他の大学出身者にひけをとらない実力を示している。

この墨東病院も建物の老朽化が著しいため、今年度から四年計画で改築し、その間病床数と外来の縮小が行われるが、これが完成の暁には、最も近代化した病院として再出発する予定である。

前頁より

が、急に風邪のために欠席された川喜田愛郎先生には、お目にかかれず残念であった。

当初の幹事の心配もとより越し苦労にすぎず、終始なごやかに、恩師達の二十年ぶりの講義に久し振りで耳を傾けた。まさか、学生時代一度もその先生の講義に出ず、今回はじめて聴講するといふものはないと思うが、次々に面白いお話を先生方から聞くことが出来た。司会をいっしょにやってくれた松本君の名進行係りで、予定時間はあつという間に過ぎ、お集まりいただいた恩師の先生方も、久しぶりに昔の教授会や学生講義を思い出して下さったのではないかと思います。同級生の集まりも、例年になく多く、三十一名が集まり昔のこと、現在のこと、とくに子供の教育など、恩師の前では若いつもりでもやはり実際の年令には勝てない話題が中心となった。本当に楽しい一夜であった。

(二外科 小越章平記)

鈴木五郎名譽会長の 獅胆鷹目の話に追加して

名譽教授 鈴木 宜 民 (昭11卒)

昨年のるのな同窓会報72号に鈴木五郎先生が、外科医の心得ともいふべき獅胆鷹目行以女子の三輪先生ゆかりの言葉について、思い出をお書きになったが、会員の皆様に覚えておられると思う。その言葉の由来は、明らかでないが、蘭語の独訳Ein Doctor Muss ein Falkenauge云々を、おそらくシーボルトに師事した蘭学者で漢学者でもあった人が訳したものであろうとことである。

要するにその出所、原典は残念ながら明らかでないようである。ここで、私が紹介しようと思うのが、古代インド医学であるアユルヴェーダ(サンスクリット語、生命の科学とか学問の意、紀元前一〇〇〇―五〇〇年頃のもの)を伝える大地原誠玄訳の「スシュルタ本集(一九七一年刊)である。古代インド医学については、恩師である伊東・鈴木(正夫)両先生によつて英訳本から和訳されたスシュルタ大医典のあることについては、ご存知の方もおられると思うが、サンスクリットの原典から直接和訳された大地原の本については、あまり知られていない。

そのスシュルタ本集、膿瘍切開の文中に、私の注目したのが次の一節である。

「施術に際しては、心は大胆に、術は敏捷に、器は鋭く、汗を出

当するメソボタミヤ地域)にはいたと思われ。このことは数年前国立東京博物館での古代シリア展に出品された多くの出土品の写真集から知ることができ、そのなかには顔は人間、胴はライオンで翼と猛禽の爪のついた足をもつたものもある。エジプトのギゼーの大スフィンクスは体はライオンの頭は人間であり、BC千五百年頃のものとされている。スフィンクスの起源は古代オリエント、すなわちBC二千年頃のバビロニア時代の神話に出てくる怪物であるが、要するに、王者の権力を象徴したものとされている。その後エーゲ海沿岸地方には胴体に猛禽の翼のついたスフィンクスが見られるようになり、また女神を表わす上半身が女性のものもあるといわれる。ここで私は三輪先生ゆかりの格言の由来に思いあたるような気がしてきたわけである。

当時帝王の権力は絶大で果敢即行、民衆は畏怖していたであろう。例えばバビロニアのハムラビ王法典には、眼に針をして(それが白内障の針刺術であったとの説もあるが明らかでないのが残念)失敗すると片腕を切断されたという。それは丁度地上では獅子、空からは猛禽の恐ろしさに匹敵するものとして、その権力を象徴してスフィンクスを帝王の墓とか宮殿に造ったものと思われ。そして権力を持った王者のなかにも、やさしさを備えた女神の存在を表わしたもの、それが上半身は女性の姿をしたスフィンクスではなからうか

話を初めに戻して、Ein Doctor muss 外科医に要求される果敢

機敏を表わす言葉に、古代の人々が象徴とした獅子と鷹を誰かが引用したか、勿論それは知る由もないが、恐らく同時代か、あるいは後世のギリシアあたりの医家ではなかったかと考えられる。そしてそれが広くラテン諸国に伝わり、初めに述べたようにオランダを紹介して本邦に伝達されてきたと見るのが妥当ではなからうか。

終りに、スシュルタとの関係であるが、スシュルタには心は大胆に、術は敏捷にとあつて、意味するところは同じであるが、動物の名は使っていない。また女手をもつてするの代りに器は鋭利云々の表現などは、むしろ近代的な印象を受ける。スシュルタはBCの五、六世紀の人とも、ADの五世紀頃の人とも云われるのは、それなりの根拠があると考えられる。勿論バビロニア文明がいつインドに伝達されていたかは知る由もない。鈴木名譽会長の云われるように、獅胆云々の格言の出所、原典は明らかでないが、獅子といふ、鷹といふ二つの動物を象徴として用いている点、その言葉の由来は古代オリエント、恐らくバビロニア時代であると結論することができよう。その言葉が四千年後の今日、遠く海を渡つてわが国に伝達されて、本学第一外科学教室にふしぎといふべきこと、考えようによつては、それは人類文化の遺産とでもいふべきものであろう。

計 報

- 古山一夫氏(大正8年卒・56・1・18死亡)
- 矢ヶ崎勘七氏(大正5年卒・56・1・20死亡)
- 中野 厳氏(昭和11年卒・56・1・25死亡)
- 有賀一雄氏(昭和22年卒・56・2・2死亡)
- 田中省吾氏(大正4年卒・56・3・4死亡)
- 鈴木義一氏(大正10年卒・56・3・6死亡)
- 島田真一郎氏(大正7年卒・56・4・7死亡)
- 河合正太郎氏(専25年卒・56・4・12死亡)
- 田 紀克氏(昭和39年卒・56・4・17死亡)
- 植田敏夫氏(昭和10年卒・56・4・19死亡)
- 砂田恵一氏(大正8年卒・56・5・5死亡)
- 斎藤吉郎氏(昭和4年卒・56・5・9死亡)
- 佐藤隆房氏(大正2年卒・56・5・21死亡)
- 赤羽泰造氏(昭和9年卒・56・5・25死亡)
- 金子 力氏(昭和12年卒・56・6・8死亡)
- 河野通幸氏(昭和8年卒・56・6・10死亡)
- 橋本治雄氏(昭和8年卒・56・6・16死亡)
- 羽鳥 実氏(昭和31年卒・56・6・18死亡)
- 奥村 通氏(昭和11年卒・56・7・1死亡)

編集後記

○越田 稯氏(大正9年卒・56・7・18死亡)

○本号は本年度総会記事・会計報告・各クラス会等の多数の記事を頂戴し六頁となりました。ご覧の通り、各クラス・各地区のものはなには頻りに盛会裡に開かれていくことは、御同慶ですが、年一回の総会は極めて淋しいことは残念である。本年は医学部本館の五階講堂(昔の屋階大講堂)で開催された。NHK解説委員の顔なじみの萩原宏平氏の講演は立派な、心にせまるものがあり、有意義な話であった。先輩・後輩のたての繋がり、唯一の場としても出席すれば意義あると考えている。

○医学部学生も夏休みに入り、クラブ活動・医学生ゼミ・その他に活躍しているときであり、今年の夏の暑さはまた格別の感がある。医学部教授会の長期計画委員会は先頃頻りに委員会を開き、るのはな地区の長期計画的写真が出来る位置に、体育館・図書分館の位置もほぼ決定されようとしており、待望のわが同窓会館もこれらの最終決定をまつて、建設位置が決定されよう、建設には会員各位の御助言・御支援を仰がなくてはならないと思う。

○本号にもまた多数の身近な方々の訃報を掲載しなければならなくなり、また。花巻の大先輩佐藤隆房氏・成東病院長田紀克氏・越田稯氏などであり、謹んで御冥福を祈ります。(奥井勝二)